

「里山の過去、 現在、 未来」



独立行政法人 森林総合研究所関西支所
<http://www.fsm.affrc.go.jp/>

国際的な視野からみた日本の里山の意義

深町加津枝

里山は日常生活および自給的な農業や伝統的な産業のため地域住民が入り込み、資源として利用し、攪乱することで維持されてきた、森林を中心にしたランドスケープ（景観）である。日本のSATOYAMA（里山）のもつ今日的な意義は、持続的な資源利用や地域固有の文化の伝承、あるいは絶滅危惧種を含む生物多様性の保全などの観点から国際的にも認識されつつある。里山は時代によって変化しながらも、日本特有の景観を呈し、日本人の心のふるさとの景を形成してきた。

例えば、日本の里山とイギリスの田園景観を比較すると、それぞれの特徴に大きな相違があることに気づく。気候や地形、森林率などの相違のみならず、米を主食とする日本とそうではなく家畜の比重がより高いイギリスとでは、景観を構成する要素や土地利用、地域資源の管理の方法が必然的に異なる。同じく米を主食とするフィリピンと比較してみても、自然環境、信仰や年中行事など文化的な背景、近代化の速度などの相違によって、それぞれ独自の里山景観がみられる。

日本の里山の特徴の1つは、稲作を基調とした畦畔や水路のネットワークが存在することである。隣

接する林地では薪炭利用のみならず、水田に有機肥料を供給する場として採草や落葉採集などが定期的に行われ、焼畑や茅場などとしても利用された。図-1で示す1900年頃の丹後半島山間部の事例のように、一年を通じた生活や生業のサイクル、火災といった非日常的な出来事、あるいは自然攪乱によってその姿を変えながら里山の景観が維持されてきたのである。

この集落ではチマキザサを主な材料とするササ葺き家屋があり、その周辺にはカキやウメなどの畦畔木を



里山にみられる松林景観（琵琶湖西岸）

ともなった棚田や、樹叢に囲まれる神社があった。日常の薪としてはナラ・シデ類が最も好まれたが、集落から比較的遠距離にあり、高蓄積かつ大面積の共有林にはブナが多く分布し、大火の際の集落の復興のための炭焼きや、家屋の自家用材などと、主に非常時用の備蓄としての役割を果たしていた。

琵琶湖西岸地域の里山に目をむけてみると、ここではヨシ葺き家屋や焼き杉の板と漆喰の家屋、地元の石材を使った石垣や水路がみられる。集落周辺には地域住民の生活に不可欠であった松林、コナラ林、茶畑や竹林などが分布した。稲を干すために棚田の

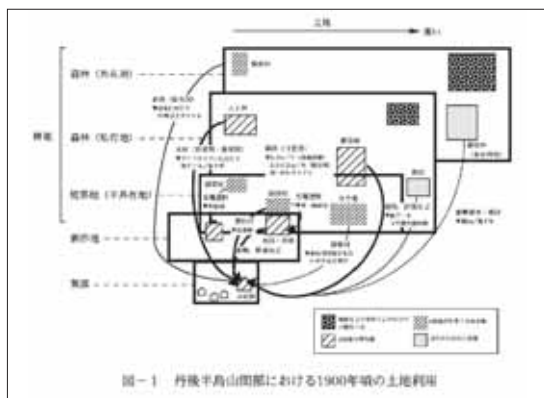


図-1 丹後半島山間部における1900年頃の土地利用



伝統的なヨシ葺き家屋（琵琶湖西岸）

畔に列状に植えられた箸状に刈り込まれながら維持されてきたクヌギの稲刈は、この地域ならではの景観といえよう。

「山の神」の祠を取りまくエノキやタブの大木などで構成される孤立樹林地は、かつては山仕事に向かう道中に立ち寄って安全を祈願する場であり、大木をむやみに伐ることを戒める伝説も多く残っている。

こうした独自性の一方で、広葉樹を定期的に伐採し萌芽林として持続的に使う土地利用などは、世界各地で共通する技術や制度などを背景とするものであり、その結果遠く離れた国の間にも類似した薪炭林の景観が発達することもある。そしてまた、近代化にともなう薪炭林の管理放棄や、農地にある小規

模樹林地の伐採などは、日本に限らず経済発展の道を歩んできた他国での事例と共通した変化の方向を指し示しており、社会的な問題となりつつある。

特有の構成要素をも含む自然と文化の複合環境系である里山の歴史や地域性を、国際的な視野で再認識し、丁寧に読み解くことによって、環境を見極めて地域資源を合理的に利用してきたシステムや、その中で培われてきた地域固有の知恵や技術、制度、デザインがより鮮明に浮かび上がってくるといえよう。

深町加津枝（katsue FUKAMACHI）

森林総合研究所関西支所森林資源管理研究グループ（主任研究官）

地方自治体による里山林保全・利用の現状と課題

田中 亘

近畿地方の地方自治体による里山林の保全・利用の現状を俯瞰的に捉えるために、近畿2府5県（三重県・滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県）の全392市町村を対象として、「自治体における里山林保全の取り組み状況に関する調査」を郵送アンケート形式で行った（2002年9月発送、回収率54％）。本アンケートでは里山を以下のように定義した。「古くから農業用や薪炭用、山菜取りなど人々の生活に利用されてきた里近くに存する森林」で、雑木林などの広葉樹二次林やアカマツ林・竹林などが含まれ、スギ・ヒノキ人工林は除いた。

現時点で里山林が日常的に利用されていると答えた自治体は約半数であった。その利用内容では、山菜採りやシイタケ栽培などの旧来的な資源利用が三重県・和歌山県の林業が活発な自治体で、「散策場所として」といったレクリエーション利用が大阪府など都市近郊の自治体で比較的多く挙げられる。

里山林が以前ほど利用されなくなったことから問題が生じているかどうかについては、60％の自治体が「問題がある」と回答している。鳥獣害・廃棄物の不法投棄・管理担い手不足・境界管理の困難さ・竹林の拡大といった点について25～30％の自治体が

問題視している。それらへの対処として、鳥獣害および廃棄物の不法投棄への対策を行っている自治体がいくつか見られた。しかし、それ以外の問題に関してはほとんど放置しているのが現状のようである。

里山林の利用・保全に関する自治体独自の施策や条例の有無について、「ある」と回答した自治体は11％に過ぎない。80％はそのような施策を持っていないということである。具体的には、里山林を利用した環境教育向けの施設整備が挙げられていた。恒久的な条例で里山林の利用・保全を図るというよりも、単年度あるいは複数年度の事業で整備を行う事例が多い。大阪府の自治体では26％が「ある」、15％が「検討中」と回答し、府県別に見ると傑出して意欲が高い。緑が少ないながらも、あるいは緑が少ないからこそ身近な自然を残そうとする姿勢がうかがえる。

里山ボランティア活動との関わりについて、全体では約3分の1の自治体が域内でボランティア活動を確認している。支援を行っている自治体は全体の約2割であるが、「事例あり」と回答した自治体を母数とすると、約3分の2が支援を行っていることになる。これは、自治体主導で立ち上げられたボランティア団体も少なくないことが要因と考えられる。具体的には「補助金支給」や「情報提供」を通じた



里山林を散策する中学生たち（京都府）

協力関係にある。府県別ではやはり大阪府の自治体が目立ち、59％がボランティア活動を確認し、30％が支援を行っている。

アンケート結果を通じて、人口密度が高い（人目が多い）ゆえに里山の荒廃が目立つ都市部と人工林率が高く適度に人手が加えられているためにそれが目立たない過疎町村部との対比が際立った。人目の多さは大阪を中心とする里山林ボランティア活動とも直結しており、都市近郊の自治体においては里山林の保全・利用の取り組みに対してより積極的に取り組まざるを得ない状況がうかがえた。また一方で、廃棄物の不法投棄への対応など現状に追いついていない面も浮き彫りになった。

田中 亘（Wataru TANAKA）

森林総合研究所関西支所森林資源管理研究グループ（研究員）

里山保全活動の参加者たち（滋賀県）



表－1 里山林保全・利用の現状

	有効回答数 (回収率)	日常利用		利用されないことから発生する問題点								独自の施策や条例			ボランティアの事例		
		されて いる	されて いない	ある	(複数回答)						ない	ある	ない	検討中	ある	ない	あると 思われる
					産業物 投棄	竹林 拡大	管理担い 手不足	境界管理 が困難	開発	鳥獣害							
三重県	32％(46％)	53％	47％	59％	34％	22％	19％	22％	3％	28％	34％	6％	91％	3％	19％	69％	9％
滋賀県	33％(66％)	39％	58％	67％	33％	27％	48％	27％	6％	30％	24％	6％	85％	9％	33％	64％	3％
京都府	24％(55％)	54％	46％	75％	29％	46％	38％	38％	4％	42％	17％	20％	72％	0％	32％	52％	8％
大阪府	27％(61％)	37％	59％	63％	41％	26％	22％	19％	5％	19％	33％	26％	59％	15％	59％	37％	7％
兵庫県	54％(61％)	63％	35％	61％	31％	24％	28％	26％	6％	33％	28％	9％	78％	6％	33％	48％	7％
奈良県	22％(47％)	18％	64％	41％	9％	14％	18％	9％	0％	27％	50％	0％	87％	0％	7％	87％	7％
和歌山県	26％(52％)	50％	42％	46％	15％	12％	15％	12％	0％	23％	27％	8％	88％	0％	19％	77％	0％
全 体	212％(54％)	48％	48％	60％	29％	24％	28％	22％	5％	29％	30％	11％	80％	5％	31％	59％	6％

注:合計して100％にならないのは無回答があったため

The History and Prehistory of Landscapes in England

Oliver Rackham

The island of Britain is three countries — England, Wales, and Scotland — each of which has its own types of landscape.

England, like Japan, is a land of ancient settled civilization. It has relatively small areas of mountain and forest; with a history of dense population, most of the area has been farmland for at least 2000 years. The crops are all dry-land plants, so irrigated terraces are unknown. Until recently nearly all farms had animals (cattle, sheep, pigs, horses) as well as crops. Fields are surrounded by hedges and dry-stone walls. Woodland forms islands surrounded by farmland.

The infrastructure of English landscapes has grown up over centuries, and has accumulated features from many periods up to 3000 years ago. Some of these are still in use; others have gone out of use and are preserved in land that was formerly cultivated. For example the ridge-and-furrow created by medieval ploughing — analogous to rice terraces — still covers large areas that are now grassland or woodland.

Landscapes have to be studied individually. There is no single ‘traditional’ landscape that was stable for centuries until the coming of mechanized farming. In some parts of England the landscape of 200 years ago was very different from the landscape of 400 years ago, but in others it was almost the same. ‘Some traditional’ landscapes are themselves the result of earlier periods of agricultural intensification.

As many kinds of information as possible should be combined in the study of landscape history. In England these include:

- (1) Pollen analysis, especially useful for the prehistoric period;
- (2) Written records (available from about 1300 years ago), maps (from 430 years ago), place-names, pictures, early air photographs;
- (3) Archaeology, both standing features (banks, ditches, walls, ridge-and-furrow) and features visible only in air photographs;
- (4) Off-site archaeology, such as the materials of early standing buildings;
- (5) The distribution of plant species, especially those characteristic of ancient or recent woods and hedges;
- (6) Ancient trees, especially pollards and coppice stools, which give



林内放牧されドングリを食べて育つ豚（イギリス）

evidence of management history and can be dated from their annual rings.

In the third quarter of the twentieth century many historic landscape features were destroyed by modern farming and forestry. This is no longer so: modern forestry is in retreat and agriculture is on the verge of decline. Historic landscapes are now much better understood, protected; they can be restored and even copied. The remaining threats are from development in the south-eastern third of England, and from disuse in the remainder; and also from introduced tree diseases and from excessive numbers of deer.

The study of landscape history has been uneven. I would expect future research to extend it into parts of England as yet little known, and into Wales, Scotland, and Ireland. Even the best-known parts are still not fully understood: the origins of roads, ponds, and heaths can often not be dated even within several centuries. Major discoveries have recently been made even within 15 km of Cambridge. There is still a wide gap of understanding between the medieval infrastructure of 1000 years ago, of which many components are still extant, and the prehistoric world revealed by excavation and survey archaeology.

歴史から読み解くイギリスの景観

オリバー・ラッカム

イギリスは日本と同じように長い歴史があり、最近までほとんどの農家が作物を栽培し、家畜を飼っていた。農地は生け垣や石垣に囲まれ、樹林地は農地に浮かぶ島のように点在している。何世紀にもわたって発達してきたイギリスの景観の基盤は、3000年を越える歴史の上に積み上げられたものであるが、20世紀の最後の25年間に、多くの歴史的景観が近代的農林業によって破壊されてしまった。景観形成史の研究では、多種多様の情報を組み合わせ、個々のランドスケープは1つ1つ精査する必要がある。農業が機械化されるまで、何世紀もの間安定していた唯一の「伝統的」景観というものはない。ある「伝統的」景観は、それ自体、農耕が拡大した初期の時代の結果といえよう。

Oliver RACKHAM

ケンブリッジ大学コースクリスティカレッジ(教授、フェロー)

Status of Satoyama Studies in the Philippines

Inocencio E. Buot, Jr.

Attention has never been stressed in the study of satoyama, a working landscape rich in natural and cultural history in the Philippines, as has been done in Japan or in England. Several fragmented studies had been conducted emphasizing the landscape fragments of concern, frequently the agricultural patches. Even the world famous rice terraces of the country inscribed in the UNESCO World Cultural Heritage Sites has not been investigated that much. Hence when problems crop up, solutions seem to be remote as there had been no predictive studies, results of which could have served as warnings triggering the quest for the appropriate answers.

Very recently, we set the pace of the satoyama studies in the Philippines by first looking into the floristics of the landscape in the three island groups of the country: Luzon, Visayas and Mindanao, in the north, central and southern part of the island archipelago, respectively. Three distinct types were found: 1) satoyama associated with rice farms dominating the northern Luzon region, 2) satoyama associated with rice and other crops in southern Luzon and Visayas, and 3) satoyama associated with corn and other crops in Visayas and Mindanao. Preliminary results indicate the indigenous wisdom of the ancestors in domesticating the right crop that would survive and sustain life considering a particular topographic and climatic condition in the country.

We also envision to study the distribution of the distinct flora and vegetation patches with respect to the distance from anthropogenic settlements and activities and the dynamics of the overall landscape. With these, we hope to gain better insights on how to manage the satoyama working landscape which is beset with so many problems these days.



フィリピンの萌芽林



Mt. Mayonの林から薪を運ぶ人（フィリピン）

フィリピンにおける里山研究の現状

イノセンシオ・ブオート

フィリピンにおいて、「里山」にあたる景観の研究は、イギリスや日本ほど熱心に行われてきてはいない。しかし最近になって、「里山」の研究が開始された。国内を概観する研究により、フィリピンの里山的な景観が北部ルソン島の稲作をともなうタイプなど3つに大別できることが分かってきた。そこには、過去の人々が、巧みに地形や気候条件を考慮しながら、それぞれの農耕を選択してきたことが読み取れる。今後は、耕作などの土地利用の様式や集落からの距離などが、周囲の植生にどのような影響を与えてきたか、などを明らかにしていきたい。そのような研究から、現在フィリピンが直面する「里山」管理に関わる様々な問題を解決するための、よりよいヒントが得られるのではないかと考えている。

Inocencio E. BUOT, Jr.

フィリピン大学(助教授)
森林総合研究所関西支所外国人特別研究員(平成15年～17年)

表紙写真[上から]

- フィリピンの水田と集落
- 丹後の里山に春の訪れ
- 緑深い琵琶湖西岸の棚田とハサ木
- イギリスの林間放牧地の景観

発 行 所 / 独立行政法人 森林総合研究所関西支所

〒612-0855 京都市伏見区桃山町永井久太郎68番地

TEL (075) 611-1201 FAX (075) 611-1207

印 刷 所 / 株式会社 田中プリント

〒600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町677-2

TEL (075) 343-0006 FAX (075) 341-4476